

フランスにおけるエドガア・ポオ の影響と評価について

(昭和47年度始業講演要旨—文理学部)

江 口 裕 子

エドガア・ポオ(1809—1849)はもう百二十余年も昔の人であるが、彼の作品は時代をこえ、国土をこえて古来のアメリカのどの作家よりも多く読まれてきた。その文学の質もスケールも全くちがうシェークスピアやゲーテのような大文豪と肩を並べて世界中の人々に広く読まれてきた作家である。しかしまた、ポオほど極端な賛否両論の対象となった人も他に例がなく、彼の評価に関してはポオの死後、毀誉褒貶の両極端にわたって数知れぬほどの書物や論文が書かれてきた。このつきることのないポオ論議の歴史を全体的にながめると、大別して英米圏とヨーロッパ圏の批評とに分れ、とくに良俗に反する文学としてポオを拒んだアメリカと、近代文学の祖としてその思想と芸術を高く評価したフランスの評価は極端な対立を示している。ヨーロッパにおけるポオの名声にもっとも抵抗を示したのはアメリカ本国であり、今日でも彼を代表的なアメリカの文学者と見なすことに躊躇を示す学者や批評家は少なくないし、本国の文学伝統に定着することも、真価を理解することも困難なエニグマ的作家であるという見方はアメリカには依然として存在するのである。これにはポオの生前から英米の著名な作家や批評家がポオにあたえてきた疑惑や酷評が影響していることは確かである。

ポオと同時代のエマーソンはポオを“Jingle man”と呼び、ローウェルは「五分の三は天才なれど、五分の二はざれ言なり」という揶揄的な批評をあたえた。ジェームズは「ポオに熱中することは、熟慮内省が明らかに原始

的段階にある証拠である」と評し、エリオットは「ポオが強力な知性の持主であることは否定できないが、それは高い才能に恵まれた思春期以前の青年の知性のように思われる… 稀な精神と感性をもちながら、情緒的な発達がある点で、若い頃に止ってしまった人である」といい、ハックスレーはポオの詩は俗悪であり、趣味の悪いことは「十本の指の一つ一つにダイアの指輪をはめているようだ」と彼一流の辛辣さでポオを評し、現存の批評家のなかでももっともポオへの風当りのつよいY. ウィンターズに至っては、ポオの詩は「召使いの小娘の心を喜ばせる芸術である。円熟した大人で、このような類いのものを本気にする人がいるとは驚きいった次第だ」と、フランスの詩人たちのポオへの敬意をあてこすっているのである。エリオットもハックスレーも、フランスの詩人たちのポオに対する過大な評価は、英詩や作詩法についての理解力の不足から来ると見なして、ポオのフランス的評価を否認するのに十分自信ありげである。

一方、ヨーロッパにおけるポオの名声を確立したのはフランスであり、ポオの死と前後して、ボオドレーが彼を発見し、十七年間心血を注いだ翻訳によって彼を紹介して以来、フランスは一貫してポオに敬愛の念を抱き、彼を今日の世界的な地位に押し進めるのに指導的な役割りを果たした。アメリカではポオの影響を直接にうけた文学者の名を求めるのは困難だが、フランスでは詩・散文・批評の各分野にわたって彼の影響はどの外国作家にもまさって深甚であり、シェリーやロゼッティのようなラテン的作家もポオには及ばない。しかもアメリカ本国で軽視されているポオを師匠として範を仰ぎ、彼の名をヨーロッパで復活させたのが、近代詩の伝統のなかでもっとも重要な位置を占め、各々の時代のトップクラスの知性であるといわれるボオドレー、マラルメ、ヴァレリーの三人であったということは、ポオ研究者にとっては、如上のポオの二重性への関心をいやが上にもそそる事柄であるといわざるをえない。英米の作家や批評家がポオのなかに見いだしえなかったどんなものを彼らは見いだしたのであろうか。

T. S. エリオットは、彼自身これらのフランスの詩人たちに負う所が多

であっただけに、1948年にこれらの詩人とポオとの関係を分析して、彼自身はこの時点ではフランス的見解に同調しえないにしても、もしこれらのフランス人の目を通して見た場合、英米圏の人々が見そこなった、より全体的なポオの作品の意義が明らかになるのではないかと指摘して、次のような自戒に近い、示唆に富んだ言葉を残した。

We all of us like to believe that we understand our own poets better than any foreigner can do; but I think we should be prepared to entertain the possibility that these Frenchmen have seen something in Poe that English-speaking readers have missed.

ポオを世界の文学のいかなる伝統のなかに位置づけしうるかという点は、私にとって常に関心事であるが、私自身はポオの一面であるローマン主義的な要素はゴシック的文学の領域でアメリカに潜在的に残り、古典主義的な要素は主として批評をとおしてフランス文学の伝統のなかに移し植えられたという見解をもっている。そして現在の研究課題はフランスにおけるポオの影響と評価の正体は何か、そしてポオの積極的な受け入れの姿勢の基となる彼らの視点は何かということである。エリオットやハックスレーのいうような、彼らの英語の理解力の不足ということだけで、すでに歴史となったこの定評を撃退できるとは思われない。それならば、フランス人がポオのなかに見だし、英米人が見のがしたものは何なのであろうか。結論を先取りしていえば、今日のポオ研究の大切な方向は、この問題を解明すること、そして American Face と French Face という二つの顔をもったポオのこの二重性を両面から修正し、矛盾対立を止揚して一つの顔へと絞ってゆくこと、それによってより総合的、より完全なポオの現代像を作りあげることの可能性を試みることにあると思うのである。

* * * *

まず、ポオドレール以後フランスでポオがいかに受け入れられ、いかにして今日の定評が築かれてきたか、その評価の歴史の一端をのべてみたい。

ポオドレールの翻訳及び伝記的評論がフランスにおけるポオ評価のいしず

えとなったのは周知の事実であるが、フランスで出た最初のポオの翻訳は、1845年、*La Revue britannique* に載ったアルフォンス・ボルゲール Alphonse Borghers 訳「こがね虫」*Le Scarabée d'or* である。ポオドレールがポオを発見したのは1846年か1847年のことであり、彼の伝記作者シャルル・アスリノー Charles Asselineau やレオン・ルモニエ Léon Lemonnier の説に従えば、ムーニエ夫人 Isabelle Meunier の「黒猫」*Le Chat noir*(1847)の仏訳によってはじめてポオの作品に接したことになる。しかし、それ以前にもポオの名をフランスで広めた一つの事件があった。それは、ポオの「モルグ街の殺人事件」の剽窃をめぐる訴訟事件である。1846年6月にパリの新聞 *La Quotidienne* に G.B. という署名で *Un Meurtre sans exemple dans les Fastes de la Justice* という見出しで物語が載った。ところが同じ年の十月 *Le Commerce* 新聞に Old Nick という署名で *Une sanglante Enigme* という名の物語が現われた。Old Nick とは、当時のジャーナリスト兼評論家のエミール・フォルグ Emile Forgues のペンネームである。これらの物語は実は二つともポオの「モルグ街の殺人」の翻案であった。二日後に別の剽窃の件でかねがねフォルグに怨みのあった *La Press* 新聞は、フォルグの物語は *La Quotidienne* に掲載された物語の剽窃であるという告発記事をかかげた。これをきっかけとして起こった、フォルグと *La Press* との間の論争は訴訟事件にまで発展し、結局はフォルグの敗訴に終わったのであるが、たまたまこの事件のおかげで、原作者ポオの名前は広くフランスの読者の間に知られることになった。ポオドレールの注目を引いたのもこの頃からであろう。

エミール・フォルグは当時の英米の新しい作品を掘り出すのに機敏な商業的翻訳家であり、後にポオドレールによって「海賊、剽窃屋のフォルグ」〈赤裸の心64〉とそしられた人物であるが、またフランスで最初にポオの批評を書いた人でもある。彼は1846年10月 *Revue des Deux Mondes* に *Etudes sur le roman anglais et Américain* と題する評論を寄せて Wiley and Putnam 版の「ポオ作品集」*Tales by Edgar Allan Poe* (1845) の批評と解

説を試みた。フォルグはラプラスの *L'Essai Philosophique sur les Probabilités* から説きおこして、ポオをラプラスに似た高度な知性の持主であり、彼の創造活動を支配する原則は強力な論理性であることを指摘する。フォルグは、ポオが彼一流の本能的な明智によって〈蓋然性〉 *probability* の領域に挑み、大胆な考察を試みた点を高く評価し、この〈蓋然性〉の実験ともいうべき物語「モノスとユナの対話」、「エイロスとチャーミオンの会話」、「催眠術の啓示」などを興味をもって分析している。自分自身の肉体が静かに崩壊してゆく過程を靈妙な第六感によって知覚している死後の人間存在の想定、また慧星の近接、それにともなう大気中の酸素の異常な増加、植物の異例な繁茂と肺臓の苦痛、ついで不可抗の自然発火による人類の滅亡、これらの哲学者も科学者もあえて解明をあたえ得ない死の神秘、地球の運命についての大胆きわまる〈蓋然性〉の物語に読者をひきつけずにおかぬ迫真性をあたえているものは、ポオの強力な論理性であると指摘する。これらの物語は英米ではあまり問題にされぬ作品だが、フォルグが「モノスとユナ」、「催眠術の啓示」のような日常的な意識体験を超えた、いわば拡大された意識の領域を探求している作品を第一に紹介している点にフランス的視点が窺われて興味ぶかい。

フォルグの評論はこのようにポオの論理的な明証性を高く評価しながら、彼の詩的想像力については殆ど言及せず、この点に関しては、“*inventeur de fantasies sans but,*” “*caprices purement littéraires*” と軽く片づけているのは、ポオの理解に片手落ちな点があるという感を免がれないし、純想像的な作品として「黒猫」と「群集の人」を解説しながら、「アッシュア館の崩壊」を全く除外しているのは理解に苦しむ点である。このことは次のような事情によるかもしれない。フォルグが批評のテキストとして取り上げた *Wiley and Putnam* 版の「作品集」に収録された十二の物語は、選者 *E. Duyckinck* が読者の反響をあてこんだのであろうが、ポオの意図に反して、アラベスクな物語よりも「こがね虫」、「モルグ街の殺人」、「マリー・ロジェ」、「盗まれた手紙」等の推理的な物語の方が優先的に選ばれていた。そう

いう詮衡の仕方のせいかも知れないし、フォルグはこの作品集以外にはあまり読んでいなかったらしいことが分る。ともあれ、フォルグが強調したポオの特質が理論好きなフランス人たちのポオへの関心を惹き起こすのにあずかって力があつたとは十分推量できることである。

1840年代のフランスでは、ローマン主義が退潮の萌しを見せはじめ、新しい時代の指針を求める文学的要望が高まりつつあつたが、ポオの作品のなかに来るべき時代の文学の方向と方法とを告げ知らせる知的価値を発見し、これを吸収しようとしたのは、ボオドレールをはじめ、創造的活動に携わる文学者たちであり、学者や批評家たちは必ずしもポオの意義を認めるのに敏ではなかつた。従つて、フランスにおけるポオ評価の歴史で重要な役割を演じているのは、ボオドレール、マラルメ、ヴァレリーを三頂点とする高踏派、頽廢派、自由詩派、象徴派の文人たちであつた。このことは同時代のアメリカでポオに私淑する文学者なく、文人批評家こぞつてポオに背を向けた事情とは驚くべき対照をなしている。アメリカで出版された最初のポオ著作集 *The Works of the Late Edgar Allan Poe* (1850) が、歪曲と誹謗で悪名の高いグリズウォルド R. W. Griswold の序文 “Memoir” によって世に紹介され、他方フランスでは、ボオドレールの最初の翻訳「意想外の物語」 *Histoires extraordinaires* (1856) が過大な同情と擁護にみちた訳者の序文 “Edgav Poe, sa vie et ses œuvres” によって読者の注目を一挙にあつめたという二つの事実は、それ以後の両国間の評価の対立の歴史にたいして象徴的な意味をおびている。そして訳者ボオドレールは、時代を代表するすぐれた感受性であり、頭脳であつて、ローマン主義から一步脱却した、そして本来フランス人にアピールするようなポオの素質と傾向——詩的感性と批評的知性の稀れな結合、美学論への強い関心、表現効果への意識的な模索——をいち早く感知し、ほとんど彼自身の創造といえるほどの流暢な含蓄の深い翻訳によってポオの精髓を伝達した。ボオドレールとポオの出逢いは文学史上でも稀な出来事といわれる。1852年、ボオドレールは母への手紙の中で「信じられぬほどの共感をかき立てたアメリカ人の作家を発見しました」と

書き、1856年にはサントブーヴ Ch. Sainte-Beuve に「アメリカでは大したものではないポオを、フランスでは大人物にせねばならない」と書き送っている。この決意をポオドレールは実行に移し、かつ成功した。彼はポオに心をひかれて以来、ポオの作品を読むためにひたすら英語の研鑽を重ねるかたわら、ポオが編集者をしていた時期の *Southern Literary Messenger* を集めたり、ポオの作品や伝記について出来るだけ多くの資料と情報をうるために努力した。彼は最初の作品集「意想外の物語」及び第二の作品集「新意想外の物語」 *Nouvelles histoires extraordinaires* (1857) を次々と世に送った後も、彼の死の二年前まで十七年間の長きにわたってポオ作品の翻訳に打ちこんだ。この翻訳はクレペ版ポオドレール全集十九巻のうち五巻を占めている。彼ほどの創造的天分をもった文学者がこれほど長年の間、第二義的な翻訳仕事に心血を注いだということは文学者の生涯として特筆に値いすることであり、ポオドレールの精神史のなかでポオの存在がいかに重要な位置を占めていたかを物語っている。彼は晩年に近く、「毎朝、あらゆる正義の源たる神々、また仲介者として、私の父に、マリエットに、そしてポオに祈りをささげること」(〈火箭〉)という言葉を残しているが、ポオの訳業の成就をねがうことは、彼にとっては敬虔な祈りとなっていたのであろう。このようなポオへの傾倒から生まれたポオドレールの翻訳はいわば両者の合作であり、訳文は原作にきわめて忠実で、一語一句にいたるまで逐語訳といってもよいものである。訳文にはポオドレールの英語の理解力の不足を示す誤訳も往々にして見い出されはするものの、原文を凌ぐニュアンスや暗示力に富んだ名文であったり、不手際な語句が修正されている場合も少くない。彼の訳は今日でも尚スタンダード版であり、NRFのプレイアド版の訳本は版を重ね、ときに改訂されて市場から絶えることがない。そしてまた。「パリ評論」掲載の最初の評伝「エドガア・ポオ。生涯と作品」(1852)、「意想外の物語」の序文「エドガア・ポオについての新しい覚え書」*Notes nouvelles sur Edgar Poe* (1857) はそれ以後のポオの批評や鑑賞の手引きとなり、彼の描いたポオ像は今日も尚フランス人の心に深く銘記されている。

ボオドレールは、ポオにドルと物質万能の巨大な産業主義国に生まれて所を得ず、悲運の生涯を送った〈呪われた詩人〉poète maudit、美の殉教者として、パセティックな背光をまといわせており、あまりにも自己の主観を投入しすぎ、自己弁護の匂いも多分にするポオ論である。ボオドレールほどの批評家にして、距離をおいた冷静な分析を欠く点で、今日批判修正をうける余地のあるものだが、とも角ポオの研究史のなかで、英米圏の批評に対抗する一つの有力な伝統として今日まで存続しつづけてきた。

ボオドレールが第三の作品集 *Histoires grotesques et Sérieuses* (1865) を公けにした1860年代は、ゴーティエを創始者とする高踏派の文学運動は全盛期に達していた。この作品集には「大鴉」及び「創作の哲学」を訳出した *La Genèse d'un poème* が含まれており、当時の文学者たちが英語に十分通曉していなくても、翻訳をとおしてポオの文学に接することができたことは明らかである。ルコント・ド・リール Leconte de Lisle, テオドール・ド・バンヴィル Théodore de Banville, カチュル・マンデス Catulle Mandès シュリ・プリュドム Sully Prudhomme, ヴェルレーヌ Verlaine, ヴィリエ・ド・リラダン Villiers de l'Isle Adam, フランソワ・コペー François Coppée 等、高踏派の傘下に集まった詩人たちは、芸術自身のための芸術、知的創造としての芸術、情熱の排除と観念の統一、知性と技術の結合による完璧な仕上げ等という彼らの美学の先蹤者をポオのなかに見いだした。彼らの会合ではしばしばポオの作品や詩論が重要な話題となり、新鮮な驚きと興味の源泉となった。ボオドレール自身がポオの文学理念にいかにかに共鳴し、これを自己薬籠中のものとしたかは、彼の「エドガア・ポオについての新しい覚え書」を読むだけでも十分である。彼はポオの「詩の原理」のもっとも独創的な主張を、「創作の哲学」、「二度物語」*Twice-Told Tales* 中の所見と組み合わせて、その大要を紹介する、というよりほとんど自分自身の主張としてポオを代弁しているといった方がよい。「覚え書」では、詩の長さ、情緒の排除、想像力の機能、分析的理性の役割、詩のための詩の主張、効果の統一、詩の音楽性等、フランスの象徴詩の根本原理となる大切な問題を取り

あげている。さらにボオドレーは、1859年の「テオフィル・ゴージェ」論のなかで、「覚え書」中のもっとも骨子となる個所を自分の文章として引用している。この部分是用語、文章表現まで「詩の原理」の翻訳といってもよいものであり、ヴァレリーさえ控え目ながら、剽窃の事実をみとめているのである。ボオドレーは「詩の原理」から余りにも強烈な啓示を受けたため、もはや自他の思想を引きはなすことのできぬほど自己を侵蝕され、思想のみならず、表現形式まで自分のものとせずにおれなかったのであろう。次の彼の言葉はそれを裏づけている。

人は私がポオを真似ているとって非難します。私がこんなに根気よくポオを翻訳する理由がお分りでしょうか。彼が私に似ているからなのです。初めて彼の書物の一冊を明けたとき、私が夢想していた題目のみならず、前から考えていた文章を、彼が二十年前に書いていたことを発見して、私は驚喜したのです。

けだし、ボオドレーにとってポオは〈精神的雙生児〉であり、彼はポオとの出会いによって自己を発見し、深化させ、ポオの思想体系を継承発展させるよりも、これを遵奉し実践することによって、己れの独創的天分を開花させることができたのであり、ボオドレーによるポオの発見、そして如上の完璧な自己投入がなければ、ヨーロッパにおけるポオの声価は今日の如くはならなかったであろう。ポオももって瞑すべしである。

詩の分野でボオドレーがなしえなかったことを受けついだのは、マラルメである。彼は1875年にはじめての翻訳本「大鴉」*Le Corbeau* を出版し、さらに1888年には「大鴉」以下二十の詩篇をふくむ「エドガア・ポオ詩集」*Les Poèmes d'Edgar Poe* を公けにした。これがマネの挿絵数葉を入れた大型豪華本で、フランスにおける記念すべきポオの出版物である。訳文は韻律ゆたかな散文体であり、ポオの意図した詩的效果、韻やリズム、反復やパラリズムの駆使がもたらす原詩の精妙な美が十分生かされていない点は遺憾である。とはいえ、マラルメの訳詩はフランスの詩人や、詩の愛好家にもてはやされて、ポオの声価を決定的なものとした。このことは如上の詩的形式

をとりのぞいたあとも、ポオの詩の独特な内在的価値の伝達が可能であったことの証左ともなるであろう。マラルメがポオから学んだものは、ボオドレールと同様、道徳や真理に奉仕しない、美を第一義の目的とする詩、選択と排除の厳密性による詩の純粹化、不明確さと暗示性の導入、韻文の必須条件としての調和と音楽、運動、色と匂いなどという象徴主義の本質的な諸条件であり、ポオの理論はボオドレールの理解と註釈を仲介として、より醇化洗練された象徴詩を生み出すための根本原理として、マラルメに奉仕している。「明敏の魔神、分析の天才、また論理と想像力、神秘性と計算という、こよなく斬新、こよなく心を惹く組み合わせの発明者、異例をみざす神秘家、芸術のあらゆる手段を探求し活用する文学の技師…」とヴァレリーが評したポオの特質こそ、ボオドレールやマラルメを魅してはなさなかったものであった。

当時の高踏派、頽唐派、象徴派の詩人たちがワーグナーとともにポオを彼らの文学運動の守護神のごとくあがめたことは、これらの詩人、また画家や、音楽家や、歌謡作者が集まったモンマルトルの一面の有名なカフェが「黒猫」と名づけられて、1880年代に殷盛をきわめていたこともポオ崇拜の一例となるであろう。しかし、ボオドレールとマラルメをのぞいては、彼らがポオを礼讃したのは、「ガス燈にかがやく巨大な蛮境」、アメリカの犠牲となった悲運の天才詩人、神秘と怪奇の作家としてであって、冷徹な分析家、意識的制作の師匠であるポオの一面を十分に評価するものは少なかったようである。

ポオ礼讃は象徴主義運動が不振となるにつれて下火となったが、二十世紀に入って彼の名譽を更新したのはマラルメの高弟、ヴァレリーである。ボオドレールが主として短篇小説の分野で、マラルメが詩の分野でポオの精神を継承したのにたいして、批評と理論においてポオを延長したのがヴァレリーであり、これら二人の先人とポオとの関係を省察し、分析して、「同胞から異様に無視されている」アングロ・サクソンの詩人の特質と、フランス近代詩の伝統におけるその意義を明らかにしたのが、論文「ボオドレールの位

置」*Situation de Baudelaire* である。ヴァレリーの純粹詩の理念とその実践とは、ボオドレーとマラルメによる熟慮と練達の時をへながら、彼にうけつがれたポオの精神的遺産にほかならない。彼の純粹詩に関する主張や方法論が、ポオの詩論といかに根本的に合致するものであるかは、後者の評論「詩法」、「詩の必要」、「詩人の手帖」、「詩学叙説第一講」等に明らかであるが、ヴァレリーが十八才のときに書いた余り知られていない論文「文学の技術について」*Sur la technique littéraire* は、彼が詩を書きはじめた頃から、すでに詩作についての視点が定まっていたことを示すもので、青年のヴァレリーがいかにポオの「創作の哲学」に触発されたか、そしてポオの説く効果の力学的計量、選択と排除による素材の純化、構成の工夫、美的形式としての象徴の用法などの諸問題にいかに思考を練っていたかをここに窺い知ることができる。

* * * *

要するに、ポオがこれら三詩人にたいして果たした役割は、種子の落ちるのに備えられたゆたかな土壌に優良な種子を、アメリカでは育たなかった種子を蒔いたということであり、フランスの詩人たちは彼を識ることによって、思考と方法とに推進力をあたえられ、よりゆたかな実を結ぶことができた。ポオがフランスにあたえた精神的遺産は、創作の実践面への影響ではなく、主として理論や思考内容であったと思われる。ボオドレー、マラルメの訳に関しても、エリオットやハックスレーの指摘する英語の理解力の不足がポオの原文の弱点を彼らの眼から蔽いかくし、かえって彼らの創造的天分を十分に発揮させるという逆効果を生んだということもできる。

ヴァレリーが「ボオドレーの位置」で説明をあたえているポオの特質は、ポオの主知的な面、即ち詩的感性を規制する批評的精神、明皙と正確と分析の天才としてのポオであり、彼が本来的に持っているフランス的性格が強調されている。しかし、ボオドレーがポオのなかに発見し、あれ迄に魅了されたのは、その一面のみではなかったろう。彼がポオの詩より物語に強く魅せられたのは、むしろその対極にあたる、ドイツ浪漫詩の遺産というべき魂

の深遠さ、夢と日常的意識の中間地帯に分けいって、理性のあずかり知らない真実性に光を投げかけることのできるポオの能力を感知したからである。ポオドレーはポオのなかに、フランス的な批評的知性、美的形式の感覚と、ドイツ的な夢みる魂のたぐい稀れな結合を発見し、ポオの文学の美と深さに驚倒した。というより、ポオとポオドレーの間にある、魂の親密な類似性が、後者のなかに抗しがたく烈しい共感をひきおこしたのにちがいない。ポオドレーはサントブーヴにむかって、ポオの批評を書いてほしいと再三頼んだとき、彼は「あなたは深遠さを愛する人だろう。それならば、なぜポオの深遠さを検討してみないのか」と懇願した。サントブーヴはこれに応じなかったし、ポオドレー自身もこの〈深遠さ〉を分析するには至らなかった。しかし彼が魅せられたポオの〈深遠さ〉への心理学的な関心は、ローヴリエール Emile Lauvrière の精神病理学的研究を経て、マリー・ボナパルト以後の精神分析的な研究のなかに生かされている。ボナパルトはフロイドの高弟であり、現代のフロイドの有力な代弁者だが、1932年に出版された大著「エドガア・ポオ。精神分析学的研究」*Edgar Poe; Etude psychoanalytique* は英米圏では奇妙に閑却されているが、フランス本国におけるその影響力は、伝統的なポオドレーの影響と相並んで無視しがたい。彼女は専門外の精神医学者であり、分析の方法があまりにも公式的で生硬であり、読者を苛立たせる欠点もある。しかし、彼女の精神分析的解釈には、ポオ研究家が誰も考え及ばなかったような個所に問題点を発見し、驚ろくような啓蒙的な解明の光をあてている。彼女の理論によれば、ポオの生涯と作品は幼児の時の無意識下の体験、即ち三才の時肺病で死んだ母へのエロティックな愛の固定観念 *Mother fixation* に支配されている。そしてこの *fixation* が現実生活における他の女性との肉体的な愛の成就を不可能にし、彼の作品に *Sado-necrofile* の傾向として現われる。彼女はポオの作品の自然の風景、人物、事件等にポオの意識下にひそんでいる母性コンプレックスの代償を見るのである。

ボナパルトの精神分析的方法は、その後のポオ研究に一つの道標を示したが、この線を継ぐものとして、注目すべきものにバシュラール Gaston Bache-

lard のポオ論がある。彼の著作には、科学哲学及び科学史に関する系列と、「火の精神分析」*La Psychanalyse du feu* (1938) にはじまる一連の想像力の研究という二つの系列がある。人間の精神の機能のうち、^{エスプリ}精神と^{アーム}魂、精神の産物である科学と、魂の産物である詩の結合と共存ということは、バシユラールの人間存在に関する基本的な図式であり、彼の著作活動がこの図式を見事に具現しているといえる。彼は精神分析学の立場から、人間の夢と意識的な思考の中間にある領域、即ち想像の領域を探求しようとした。彼は人間の気質と自然を形づくる火、水、空気、大地という四つの元素との間に照応があるという昔の科学者の説を復活させ、人間の想像力あるいは詩的資質をこの四つの基本的物質に従って分類することができると考えた。このような仮説にもとずいて、彼は文学作品のなかから豊富な詩的イメージを蒐集し分析することによって、彼の理論を論証し、展開させている。バシユラールはポオに関しては、「火の精神分析」、「水と夢」等で彼の仮説の例証として部分的に言及しているにすぎないが、ポオの自然、とくに水のイメージの解釈はきわめて興味ぶかい。彼によれば、ポオは水の詩人であり、彼の想像は水という元素によって方向づけられる。ドイツ浪漫派のホフマンとポオはよく似た作家として引き合いに出されるが、二人は本質的に対極に位置する作家であり、ホフマンは火の詩人であり、ポオは水の詩人である。自然の四大——火、水、空気、大地それぞれのしるしの下で夢みる魂は、全くことなつた様相で姿を現わし、火と水は夢想においても対立する。ポオの夢想では、火は危険信号であり、火から反発する。想像された火山は、溶岩という、とけて流れる火のイメージとして現われる。「モルグ街」の暖炉——火の象徴は粗野な性的イメージとして、反発的な様相でしか現われない。ポオの水はのまれる水ではなく、のむ実体である。それは苦悩を、生命をのみこみ、重くよどむ水、まどろむ水、死の水である。バシユラールは、ここで、ひろがる水は<象徴的な母>symbolic mother の基本的なものの一つとして、ポオの自然、とくに水は死んだ母の象徴化であるとするボナパルト夫人の説を継承している。

ボナパルト夫人に始まり、バシュラールによってさらに洗練化された精神分析的方法は、フランスにおけるその後のポオ研究に隠然たる勢力をもっているように思われる。

フランスでは、新しい批評の方法が考え出されると、とかくポオの作品が採りあげられて、その方法の試金石として価値をこころみる傾向があるのは面白い。アメリカでは、今世紀の始め、ヘミングウェイがポオは死んだといった。がフランスでは、ポオは依然として健在である。

附記：この講演要旨は、本学比較文化研究所「紀要」第三十二巻（1972年5月）掲載の拙論「フランスにおけるポオ評価の展望」より抜粋，補足したもの故，詳細は上記の論文を参照して頂きたい。